

テオナ・ストゥルガー・ミテフスカ監督

『ティトフ・ヴェレスに生まれて』(2007年マケドニア)

他、第9回東京フィルメックス上映作品



『ティトフ・ヴェレスに生まれて』はサラエボ映画祭で審査員特別賞受賞、ベルリン映画祭でも大きな話題を呼んだ。

第9回東京フィルメックスは11月22日～30日まで、有楽町朝日ホール他で開催。作品の詳細ラインナップや上映スケジュールは公式サイトまで。
http://www.filmex.net/

●東京フィルメックス・コンペティション作品

『パシールとワルツを』	アリ・フォルマン監督	2008年	イスラエル
『私は見たい!』	ジョアナ・ハジトゥーマ&カリル・ジョレイジュ監督	2008年	レバノン
『ショーガ』	ダルジャン・オミルバエフ監督	2007年	カザフスタン
『ヘアカット』	アバイ・クルバイ監督	2007年	カザフスタン
『サバイバル・ソング』	ユー・グアンイー監督	2008年	中国
『黄瓜(きゅうり)』	チョウ・ヤオウー監督	2008年	中国
『完美生活』	エミリー・タン監督	2008年	中国
『木のない山』	ソヨン・キム監督	2008年	韓国
『PASSION』	濱口竜介監督	2008年	日本
『ノ子36歳(家事手伝い)』	熊切和嘉監督	2008年	日本

※コンペティション以外では、特別招待作品12作品、蔵原惟繕監督特集12作品、ジョアキン・ペドロ・テ・アンドラーデ監督特集5作品を上映する。

日本は世界の中でも最も多様な国々の映画を劇場で見ることができる国の一つであるが、公開される映画の国籍にある種の偏りがあることは否めない。東アジアの映画と比較すると中近東、西欧の映画と比較すると東欧の映画の劇場公開は非常に限られている。11月22日から30日まで有楽町朝日ホール他にて開催される映画祭「東京フィルメックス」では中近東や東欧からの最新作も上映される。政治的、経済的に大きな変

動を経験しているこの地域の映画からは、映画としての面白さと同時に、それぞれの国の多様な事情が見られるものが少なくない。イスラエルからは、今年のカンヌ映画祭で大きな話題となった『パシールとワルツを』(監督:アリ・フォルマン)が上映される。これは、1980年代のレバノン戦争に従軍した映画作家がその戦争の意味を探るために友人たちにインタビューしたドキュメンタリーだが、興味深いのはそれをアニメーションで再現したことだ。戦

争の記憶を多くの人々の証言から再構成する映画は珍しくないが、アニメーションの手法を用いたのは初めてだろう。一方、レバノンからは、フランスの大女優カトリヌ・ドヌーヴがイスラエルとの国境に向かうプロセスをとらえた『私は見たい!』(監督:ジョアナ・ハジトゥーマ&カリル・ジョレイジュ)が上映される。ドキュメンタリーとフィクションの境界を狙った実験的な作品だが、戦争によって完璧に廃墟と化した街の風景が目の前に現われると、ドキュメ

ンタリーとフィクションの区別などどうでもいいと思えるほど圧倒される。カザフスタン映画も2本上映される。トルストイの「アンナ・カレーニナ」を現代に翻案した『シヨールガ』(監督:ダルジャン・オミルバエフ)と、周囲に反抗する不良少女を描いた『ヘアカット』(監督:アバイ・クルバイ)。舞台はいずれも大都市アルマティで、ソ連解体の後、急速な社会の変化を上げたカザフスタンの現状を垣間見ることが出来る。

旧共産圏という点では、ユーゴスラビアの一部であったマケドニアの映画『ティトフ・ヴェレスに生まれて』(監督:テオナ・ストゥルガー・ミテフスカ)も興味深い。これはヴェレスという産業都市を舞台とする3人の姉妹の物語だが、旧ユーゴ時代には人々の希望の象徴であった工場が環境汚染の元凶となってしまうという事態が背景に横たわっている。東欧圏からはもう一本、ハンガリー映画『デルタ』(監督:ムンドウルト

オ・コルネル)がクロージング作品として上映される。共同体から孤立する兄妹を神話的に描くこの作品は社会状況とは直接関係ないが、世界遺産にも指定されているルーマニアのダニユーブ・デルタの映像美は驚嘆に値する。どの作品も今のところ日本での劇場公開は決まっていないため、是非ともこの機会に見ていただきたい。異文化の衝撃を体験できるまたとない機会であることは間違いない。(市山尚三/東京フィルメックスプログラムディレクター)

次号予告



AP Images

SAPIO 国際情報誌

SIMULATION REPORT 日教組、学力テスト、奇怪な性教育の現場ほか

こんな教育に誰がした

SPECIAL REPORT あなたの知らない巨大なパワーと驚愕の`虚像`に迫る

世界を動かす『謀略史観』

次号11月26日号は11月12日(第2水曜日)発売、定価450円です。